

キンランの階段

高尾周一

会社を退く日は皆寂しい。型通りの送別会など勤めていた会社はやらない。自分が居なければ会社もたないと肩で風を切っていた男たちが、老いた肩を落としてとぼとぼ消えていく。規則が緩く好き勝手に働ける分、生命力に陰りが見えれば、檻の中で仲間から食いちぎられる前に、しっぽを巻いて出ていかなければ心身が痛むだけだ。

退職直後は朝から街を歩き回った。駅に向かうスーツのサラリーマン達についていきたくさななった。昨日は新宿、今日は高円寺へと歩いたが、ひよいとしたりきっかけて高尾山に登り虜になった。駅から直ぐに山へ入れ、一時間半も息を切らせて歩けば、頂上では富士山が正面から迎えてくれる。森の中の深呼吸、街歩きでは得られない。現役時代には山登りなどしたこともない退職者をも受け入れてくれるのが高尾山。少し慣れたら、小仏城山、景信山へと足を延ばせばよい。週一回どころか最近では二回行くほどに入れ込んでいる。

小仏城山への階段を真っ直ぐ登っていくか、右手の巻き道に入るか迷っている。五か月前の五月、見上げる階段の先が見通せないのに諦めず、いや諦めたのか、足元だけを確認して登り続けた。息は切れ、声が出ていたかもしれない。肺が膨れ、痺れた脳に仕事で出会った人々、無事に看取った両親、成長過程、時々の子の姿が通り、額から汗が落下した瞬間、現在までの自分を肯定できる高揚感に浸れた。階段脇にはキンランが咲いていた、茎の先に黄色い小花を何輪も躍らせ。薄ピンクのエビネもいた。

季節が移ろい、階段の両脇の花は、オオバギボウシ、アザミへと変わり、今はススキの穂が黄金帯びている。歌い手も鶯、蝉、蟋蟀へ。

真夏も歩き続けたせいかわ、蟋蟀の声を聞き、疲れる思いが出ている。先月からコロナの感染件数が急激に減っており、今日は人出が多い。巻き道を進むことにした。巻き道は細い茂みで笹藪を払いのけて歩く。夏にはこの道に、突き出る山百合が圧巻だった。

山百合はどの辺りだったのだろう、季節が変わると痕跡も見つけられない。張り出る木の根を跨いで、足元を確かめながら進んでいると、いきなり行く手が明るく開け、崖に突き当たる。谷の遠い向こうに杉林が整然と深い緑で展開し、手前の谷は明るい黄緑、青空と鮮やかな三分割だ。杉林の天辺は幾つかの緩い山型を描き、僅か下方、左から右へ真っ直ぐ線が抜ける、日影沢林道。遠景に見惚れるが足元、気を付けなければ、一瞬に満たない細道なのだから。

前方で白帽子、小リュック、チェック柄の高齢女性が、谷とは反対の茂みにしゃがみ込んでいる。花だろう、後で行ってみよう。

高尾山の高齢女性は皆、親切。花の名を知りたい時は佇んでいれば、通りすがりの人が教えてくれる。

高尾山詣でを始めた一年目を思い出す。ミズキの上空を舞う無数の羽虫を見て、

「あんなにモンシロチョウが飛んでる」

思わず指差した。すかさず傍にいた高齢女性が、

「あなた今なんて言った？キアシドクガ、蛾よ」

呆れ声で教えてくれた。それから毎年キアシドクガの乱舞も楽しみになった。ミズキの葉を食い尽くし、裸になったミズキがいつの間にかまた黄緑の若葉を太陽に透かすのを確認すること三度。

小リュックの女性が小道を進んだので、しゃがんでいた辺りに寄って注視するが何も無い。何だったのだろうか、枯草が地を這う茂み。

「コシオガマ」

女性が私の背中に戻ってきてくれていた。指差す先に、ラッパ状のピンクの小花が横たわっている。私はスマホを取り出ししゃがみ、小花を写そうと構えるが焦点が合わない。

「写真を撮るほどの花じゃないのよ」

「でも珍しいんですよ」

自然に会話している。

「こっちにもあったのよ」

女性が小道を下る。ついていくと、茂みからピンクの花弁が光を放っていた。

「花だけじゃなくて、葉っぱも見えるでしょ」

私に、葉まで見る能はない。

「コなんでしたっけ」

女性は一言ずつゆっくり繰り返してくれる。私はスマホに花の名をメモする。

「何があるの？」

男が登ってきていた。背が高く体格もまだ萎れていない。私より数歳若いのでは。通い始めた頃は来ている男が皆、年配に見えたが、この頃、同輩、あるいはちょっと私より若いのだと思う男を見る。男には、いかにもビジネスマンとして活躍してきた匂いが残っている。

「コシオガマだそうですよ、珍しい」

「どれが」

男にも小花が分からない。小さなピンクの一輪を教えるが、道端に花卉が落ちている風で、横たわったピンクは心もとない。男がしゃがんで構える。

「シャッターが下りない、下りない時はどうするの。変えたばかりなんだけど、前の機種の方が良かったみたい」

ぞんざいな口調で私を見上げる。

「この前スマホに変えたばかりなのよ、シャッター下りない時どうするの」

小リュックの女性も、小道の下方からスマホ話に加わってきた。

「戻すしかないんじゃないんですか」

私は適当に応じる。

「こっちにセンブリもあるわよ」

見たいと思っていた花名を告げられ、私は飛んでいく。一輪ではなかった。白い小花に黒いぼつちりのシベはツイッターなどの写真で見ていた通りだが、女性が指差しているのは株で、緑の細い葉の間から何輪もの小花が親鳥からの給餌を待つ雛の嘴のように天を向き、藤色がかった無数の蕾が膨らんでいる。

「センブリ？」

男が寄ってきて問う。

「昔は薬に使ったりしたのよ」

「図鑑で調べても分かんないんだよね」

ぞんざいな口調は変わらない。

「まあまあ、お節介なおばさんですいませんでした」

女性は茂る小道を登っていく。男も去っていった。

一人に戻り小仏城山へ登りつく。富士山はもみじ台までは青く見えたが、その後は雲に覆われてしまった。手作りの焼きサンド、チョコ菓子、毎度の昼食を貪り、さてどの道で下るか。花を探しながら日影沢林道をのんびりがスタンダード、北東尾根を越えるには気合を入れ直す必要がある、景信山まで縦走するなら、まずは小仏峠への急坂を下る。考えた挙句、小仏峠へ下りそこから景信へは向かわず、林道からバス停へ歩くことにした。泥濘が気になる道、足を下す位置を慎重に、滑らないよう、這う木の根を避けて。

急坂が二手に分かれる分岐に来た。右がより細かいが、この道を行きたかったのだ。頭をぶつけた倒木に会える。右から左へ倒れ込んだ木は、栗鼠が駆け抜ける橋なのだろう。老けたキノコがみっちり生えている。その倒木越しに、覗き見る下りの山道が、杉林の遠景と共に好きな景色。倒木の下にこれから進む風景が明るく見えている。倒木を潜る時も、

老けキノコの幹に触れる気は起きない。頭を屈め通る。

夏のキノコがまざまざと蘇る。まだ二月と経っていない。北東尾根を下山中、足元の白いキノコに気付いた。球形の頭のとげが毒々しい、人に見えた。振り返るとキャラメル色のキノコ、白い傘を広げるキノコ、キノコだらけだ。誰も来ない暗い尾根道、大小、色とりどりのキノコに見られている感覚。振り払って沢まで急ぐと、蟬がわんわん頭上から降ってきた。

「あなたには金の良さが分からない」

寿司屋のカウンターでそう呟いたのは、成功しているオーナー会社の代表だった。尾根道で突如遭遇したキノコたちが、サラリーマン時代、世話になった人々と重なる。出世する度に、相手の役職を見て付き合う相手を変えていった彼。和解しても事ある毎に力で押してきた人。在職中毎日のように情報交換してきた人々だが、名刺を失えば関係はあつと、いう間に絶えた。花の名を教え合う、高尾山ですれ違う人々と同じと言ってしまつては、己が哀しすぎるか。

冬が来る。冷気の中で何を感じて登っていたか思い出せない。遠方の山が裸の木々で白く霞む、その中に桃色の明かりを見出すのは早春だ。意外と冬の日は明るかったかもしれない。梅を過ぎれば、足元に初めて動く生き物、羽虫の纏わりを得られる。

山桜を散らせ、キンラン、エビネを生やす。小仏城山の階段を一気に、肺を膨らませ、汗を滴らせ。